

心の栄養剤 No 12

米国の作家・シェル・シルヴァスタインが書いたこの物語をご存知でしょうか？それは一人の男が子供から老人になるまでの間、リンゴの木との交流を描いた絵本です。内容は次のようなものです。

一本のリンゴの木が、少年のための遊び場になります。少年は木に登ったり、枝にぶら下がったり、リンゴの実を食べたりします。疲れたときには木陰で昼寝をしました。少年は木が好きで、木も嬉しく思っていました。時は流れて、少年は遊びに来なくなりす。

ところが、ある日、成長した少年が木の前に現れます。木は以前のように遊ぶことを勧めますが、少年は、もうそんなことはできないと答えます。それよりも買い物したいので、「お金がほしい」と言います。木はお金を持っていないから、「私のリンゴをもぎとって、まちで売ったらどうだろう」と提案します。少年はリンゴの実すべて持っていきます。木はそれで嬉しかったのです。

また、長い間、木は一人でした。

ある日、現れた少年はもう大人になっていました。以前のように遊ぶことを勧める木ですが男は「ぼくに家をくれるかい」と言います。木は「私の枝を切り、家をたてることはできるはず」と言います。男は枝をすべてきって持ち去ります。それでも木は嬉しく思います。

また長い間木は一人です。

再び、年をとった男が現れて、木に向かって「どこか遠くへゆきたい、お前、船をくれるかい」と言います。木は「私の幹を切り倒して、船をお作り」と言います。そして男は幹を切り倒して船を作って行ってしまいました。

長い年月が経ち、男は木のところに帰ってきました。切り株になってしまった木は何もあげられないことを謝ります。男は「わしは今たいして欲しい物はない。座って休む静かな場所がありさえすれば、わしはもう疲れ果てた」

と言います。木は「この古ぼけた切り株が、腰掛けて休むのに一番いい・・・。腰かけて、休みなさい」と語り掛けます。

男はその言葉に従って切り株の上に腰掛ます。木は嬉しかったと言い、物語はそこで終わります。



皆さんは、この物語をどのようにお感じになったでしょうか？

私が感じたのは、親と子の関係のようであり、本当の「愛」の姿をいっているようでもあり、しばらく自分を振り返って考え込んでしまいました。物語では、木は決して見返りを求めずに男の求めるものを提供しますが、男は木に対して一度も礼を言う事はありません。

私たちは多くの恩恵を先人から贈られています。しかし、あまりにも豊かな生活の中で、それを「あたりまえ」と受けとめてしまっているのではないのでしょうか？

これは「恩恵」を「健康」に置き換えても、同じように言えると思います。食べて～出して～寝て～歩いて、本当はすごい事なのに「あたりまえ」のように思って無理・無茶を繰り返えします

やはり、健康に暮らせている事に、心より感謝して自分の身体を大切にたわる気持ちを持って「転ばぬ先の養生」に心がけていきましょう。

今年も早いものであと2ヶ月となり、何かと気ぜわしい日々になってくると思いますが、店（キュート）は来店される方の「切り株」となれるよう心掛けて、お待ちしておりますので、「ちょっと一息」というお気持ちで、お立ち寄り下さい。

今月も皆様が健康で元気に過ごされます事を、心よりお祈り申し上げます！

